

貧民層のおかれた状態と問題点を、単に個人的観察だけではなく、こうした調査結果を含めた統計的資料によって明らかにしたことが、この小冊子を一層説得的なものにし、特に社会問題に関心をもつ人々にひろく読まれ、各方面に多大な影響を及ぼす大きな要因となったのではないかと思われる。

(東京大学医学部保健学科成人保健学教室)

## 伊藤鳳山の医説をめぐって

荒木 ひろし

伊藤鳳山（諱は馨、字は子徳、鳳山は号。一八〇六—一八七〇）は、『治痢功微篇』の著者・伊藤鹿鳴（名は孔昭）を父として出羽国（山形県）酒田に生まれ、生涯、儒（経学）を講じ、あるいは医経の考証を行い、「儒医」として一家をなした。安政四年（一八五七）に信甲越漫遊の途に上ったのち、元治元年（一八六四）田原藩に入り成章館の講師として儒学を講じ、その地に崩じた。死去にあたって群弟子から明経先生と諡され、幕末田原藩の三山の一に称せられたという。三山とは渡辺華山、鈴木春山と鳳山の三者をいうのである。

ところで、鳳山の生涯を詳細に追い『鳳山伊藤馨』を著わしたのは阿部正巳氏であるが、さらに安西安周氏は『日本儒医研究』（第二十四章）において、安部氏の研究をふまえて、鳳山の医説を摘録して懇切な記述をのこしている。こ

の二書によって鳳山の生涯と医説を瞭然と知ることができ  
る。しかし、江戸時代後期から幕末へといたる医学界の動  
向の中で、考証学といえば多紀氏を中心とする学派をただ  
ちに問題視する傾向がつつく、その周辺にあって真摯に医  
経にとり組んだ考証学者達の業績は見落されがちである。

ここに敢えて安部、安西両氏の研究を前提としてとりあげ  
る鳳山も、そうした忘れ去られようとしている学者の一人  
といえよう。安西氏以後、鳳山の医説に考察を加えた文献  
が少なくことにそれは端的に示されている。

これに反して、中国では著名な老中医であった岳美中氏  
が鳳山の医説に注目し、『岳美中医話集』（一九八一）に  
『傷寒論文字考』条文部分補正」と『傷寒論文字考統』部  
分条文補正」の二篇を収めている。その評価は「考据甚  
詳、論証嚴密、頗有卓見、对于學習研読『傷寒論』有重要  
參考價值」という正鵠をえたものである。以下、鳳山にか  
かる医学関係書目を掲げ、その医説の概略を示すことにし  
たい。

鳳山の医学著述として安西氏が掲げたのは次の十一部で  
ある。(1)『傷寒論文字改』(2)『傷寒論文解』(3)『金匱文

解』(4)『素問識折妄』(5)『傷寒論詳解』(6)『張仲景傷寒論  
自序集解』(7)『倉公伝問難』(8)『扁倉伝割解彙攻刊誤補  
遺』(9)『類聚方序故事解』(10)『傷寒論口授筆記』(11)『漢蘭  
酒話』。右のうち安西氏が摘録解説したもののは、(1)と『傷  
寒論文字改統編』および(11)とその続篇、(10)である。筆者未  
見のものも多いが、右の他、鳳山の医著には(12)『傷寒論文  
字改統編増補』(13)『難經文字改』(14)『扁倉伝問難』(実際  
は「扁鵲伝」の部分だけ)もある。これらのことから鳳山が  
とりあげた医書は『傷寒論』・『金匱要略』・『素問』・『難  
經』という医経、医方書というべき『扁鵲倉公列伝』を包  
括し、しかも吉益流古方、浅井家家伝の医学、多紀氏考証  
学を相手にしつつ自らの考証を深めていった軌跡をうかが  
うことができる(4)(7)(8)(9)(10)(13)(14)。

鳳山は父と兄を失った後、朝川善庵の塾に入り、一時期  
その養子となり朝川姓を名のった。ついで朝川家を出て尾  
張浅井氏の塾に入り浅井紫山につく。十五歳から三十二、  
三歳にいたる間である。また幼少時から鳳山の身体に刻み  
こまれた記憶は、躋寿館に『傷寒論』を講じた桃井桃庵に  
医の手ほどきをうけて酒田に鹿鳴塾を開いた先考の姿であ

る。したがって、つねに儒と医の間を往来しつつ、古文獻を古訓に基づいて読みくだいていった鳳山後年の業は、医經そのものの訓話だけにとどまることなく、時には読みかえも辞さない厳しいものである。その基盤を支えていたのは『傷寒論文字改続篇』の跋に記された次の自負であったといっても過言ではない。

先生（鳳山）平日自ら謂いて曰く、浅井惟寅（図南）かつて扁倉伝割解を著し、自らこれに序して曰く、当今の世、医方に精しくして百家に渉る者、我をおきて其れ誰ぞや。我もし唱えずんば孰れか能くこれに和せんと。某（わたくし—鳳山）の如きも亦然り。当今の世、儒経に精しくして医籍に渉る者、我をおきて其誰ぞや。我もし唱えずんば孰れか能くこれに和せん。

かつて浅井図南が扁鵲倉公列伝を手にして内経医学を検証しようとした、その論法を逆手にもちかえて医経全般に洞見を加えるという。しかも、その中心におかれたのは『傷寒雜病論』であった。安西氏は鳳山をとらえて「内経傷寒論を一貫とみる考証派に属する」という。しかし『傷寒論文字改』ならびに『続篇』などを詳細に読み、「厥陰

病名義」などに注目すると必ずしも「内経—傷寒論を一貫」とみる考証学者ではない。むしろ『傷寒論』の独自性に重きをおきつつ内経による考徴を重ねた特異な学者といつてよい。右のようにとらえられる鳳山を考証学の枠内にとりこんで多紀氏の周辺人物を検討すると、江戸後期から幕末にかけての医学思想の動向は一層興味深いものになると考えられる。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室）